

ICFIA で呪いを解く

Break a curse by ICFIA



板橋 英之

群馬大学

私は現在、ぐんま男女共同参画センターの企画「理工系に行こう！」の講師をしている。県内の女子校を回って、生徒や保護者を対象に、理工系女子の活躍を紹介する講演をしたり、実験「板ちゃんの科学教室」を開催したりしている。理工系への女性の進出を増やすのが狙いだが、幸いなことに、この企画が功を奏してか、群馬大学理工学部では、このところ、女子学生が増えてきた。では、どのくらい増えたのか、その推移を調べてみた。

入学者に占める女子学生比率は、平成10年から15年までは13%前後でほぼ一定だったが、16年以降徐々に増加して20年には16%になった。その後増加の速度が上がって、ついに昨年は2割を超えて21%になった。このままいけば、数十年後には女子大になる勢いだ。それは無理としても、当学部の女子学生比率は国立大学の理工系学部の中ではトップクラスになった。

では海外はどうか。文部科学省のHPに「各国の大学の理工学部学生の男女比」といのがあった。それによると、理工系女子の割合は、ドイツ48%、イギリス51%、フィンランド51%、フランス52%となっている。理工系なので、医薬系も入るため、理工系比率とは一概に比較できないが、日本とは大きな違いである。

何故日本では、理工系女子の割合が極端に低いのか。それは、成長の過程で聞かされる「女性は理科や数学が苦手だ」という呪文のせいだと私は考えている。日本の女性はこの呪文を家庭や学校で繰り返し聞かされるので、本人もそう思い込んでいる。このため、理科や数学の難しい問題に出くわしたときに、「自分が女性だからわからないの

だ」とジェンダーのせいにして、わかろうとする努力を無意識に放棄してしまう。結果として理科と数学の成績が伸び悩み、理工系への進学を諦めざるを得ない。私はこれを“理工になれない呪い”と呼んでいる。日本ではこの呪いが蔓延しているため、理工系女子の割合が極端に少ないのだ。

では、これを払拭するにはどうしたらよいか。そのヒントを先日福岡で行われたICFIAで見つけることができた。皆さんも気付いたでしょうか？正確なデータがないので感覚でしかないが、この学会では女性の参加者の方が多かったように思う。理工分野の日本の学会ではあり得ない光景だ。ICFIAでは“理工になれない呪い”など“GaryになれないKeiro”なのだ。意味不明だが、そんなことは端から誰も考えていない。

そこで提案。ICFIAに日本の高校生を招待したらどうか。海外まで連れて行くのが大変なら、日本で開催されるICFIA(あるいは外国人参加者が多い同様な学会)に招待したらよい。多くの女性研究者がカッコイイ発表をし、女性座長がバシバシ会場を仕切る。この光景を見たら“呪い”も一遍に吹っ飛ばはずだ。私は、“これからの日本の成長はICFIAにかかっている”と密かに思っている。